

われわれは考えているか？

——他人の考えはわたしには居心地が悪い——

他人の靴はわたしには合わない。

わたしの足は外反母趾である。わたしの足の甲は4 Eの幅広サイズである。靴は日本サイズで27.5、アメリカサイズで9.5。わたしの足形は、結構特殊である。他人の靴は、わたしには絶対あわない。

たかが靴ですらそうである。まして他人の思想は、わたしにとって極めて居心地が悪い。借り物の思想は、わたしには有害ですらある。わたしにはわたしの考えが最も心地よい。

人は10代の中頃になると、自分はいっぽしの考え方を持っていると思う様になる。まして30代、40代ともなれば、自分は合理的な考え方をしていると思う人がほとんどであろう。だが、はたしてそうであろうか？わたしはそうは思わない。30代や40代のみならず、同世代の50代や60代の人々を見ていても、その考え方の浅いことにハラハラすることが多い。

東京で珍しく大雪の降った朝、高校3年の娘は、通学のためJRの駅まで傘をさしながら自転車に向かった。だが、雪の降っている時に傘をさす必要はないし、片手では雪にハンドルをとられて危ない。

それに校則だからといって革靴である。大雪の日に革靴で行くなど馬鹿げている。雪国で育ったわたしには、雪の日に革靴をはくなど危険極まりないことなのだが、東京育ちの娘には、それがわからない。校則は、大雪の日を予想していないことは明らかだろうが、娘は柔軟に考えることができない。

同じ日、中学生の息子は風邪をひいて微熱があり、1時間目の体操の時間を見学するという。それならかかりつけのH医院でまず診察してもらって、2時間目から出席すればよい。1時間目から出席して、寒い中を体育館で体操の時間を見学する必要はない。だが、息子は1時間目から行くといい張る。

些細な様だが、子供たちの例は、一般的なルールを重視するあまり、具体的な状況に適応した判断に欠けている。

習慣の持つ力、惰性は非常に強く人間を支配するから、臨機応変に考えることは、なかなか難しい。機転をきかせるということは、場合によってはルールを無視することであり、

物事の本質を見詰めて考えることである。

この様な例はビジネスでも見られる。

依頼者の日本企業が外資と提携することになった。交渉は難航したが、やっと決着に至った。契約を締結する日を決める段になったとき、日本側の役員がいう。

10日にしよう。大安だから。

わたしは思わずいってしまった。

相手は外資だから、大安かどうかは関係ないでしょう。

国際ビジネスに「大安」という日本流コンセプトを基準にすることは、合理性に欠ける。契約の締結は、双方のトップの都合がつく最も早い時期に行うべきで、それ以外の要素を考慮していくは時期を失する。せっかくまとまりかけた交渉も、どたんばでひっくり返ることはよくあることである。

ちょっと考えればわかることがあるが、大安に契約を締結することが、両社の提携にとって具体的にどの様なメリットをもたらすのだろうか？締結が友引であろうと仏滅であろうと、両社の将来にとって何の影響もない。提携の成否は、今後の戦略と現場の努力いかんに係わっているであろう。

くだんの役員とて軽い気持ちでいったに違いない。だが、この「何げない」発言こそ、実は大変なくせ者である。何げないということは、つまりこの様な考え方が習慣化し、体質化しているということである。

状況に応じて物事を具体的に考える思考が欠けている点で、この役員と子供たちの対応に大した差はない。

——「いつでも、どこでも」メモを取る——

メモなんか取らなくても大丈夫です。若いから会議でのやりとりは全部覚えていきます。

かつて新人弁護士と一緒に仕事をした時のこと。会議でも交渉でもほとんどメモを取らない。所内の打ち合わせでは、メモ用紙も持参しない。あまりのことに、注意したが直らない。彼はメモを取る意味がわかっていない。メモを取るのは、単に後に記憶を喚起するためだけでなく、物事をよく観察するにも必要だし、何よりもメモは物事を深く考えるため

の有力な手段である。

たとえば会議でも、相手の人物、主張、要求、自分の考え方など、メモする対象はさまざまである。メモするためには物事をよく観察しなければならない。つまり、書くという作業は必ず観察を伴うものである。

相手方は感情家かどうか、思いこみが激しいかどうか、自分の体験していることを語っているのか、伝聞を語っているのか、物事を誇張、強調して話す癖があるかどうかなど、まず十分相手方を観察する。

メモを取りながら後に確認を要することには「？」を付けたり、重要だと思われる所には「※」を付けたり、会議のポイントには赤いマーカーを付けたりする。この様に、現場で取ったメモは後に物事を洞察する際の第一級の素材である。

よくよく現実を観察して、そこに埋め込まれているシグナルを読む意識がないと、ただ漫然と会議に参加し、相手のいい分を丸飲みしてしまうことになる。メモを取らない弁護士は、まず観察する心構えが足りないのである。

さらに、会議中に今後の手順や対策を思いつくであろう。会議で提示された問題点を解決するために、どうしたらよいか？その手順や方法論もメモしておく。

会議で他人の発言に触発されて思い浮かんだ発想は、すぐメモしておく。こうして積み重ねた数多くの発想が、後に事案を解決するために役立つものである。

だから、メモをこまめに取らない人を見ていると、「この人の精神はあまりにも貧しいので、何の発想もわからないのだろう」と思いたくなる。そして、この感想は多くの場合当たっている。

メモを取るコツは「いつでも、どこでも」である。良い考えだけを厳選してメモに取ろうと思ってはならない。雑念でも単なる思いつきでも何でもよい。とにかく多少でも心にひつかかる様なことは、すぐメモする習慣をつけることである。

わたしの住む所は、東京とはいっても郊外でまだ畠が残っている。桜や孟宗竹や金木犀の生い茂る遊歩道を自転車で駅まで通う。混雑した街中を通るのとは違い、遊歩道を通うときに結構よいアイデアが浮かぶ。

だが、思いついたことはすぐ書き留めないと、きれいに忘れてしまう。駅の駐輪場まで行って、さてメモをしようとするときれいさっぱり忘れてしまっている。

ましてや、途中で歯医者のK先生に会って、二言、三言朝の挨拶などかわそうものなら、思い浮かんだアイデアなど完全に記憶から消し去られてしまっている。

だから、今では、アイデアが浮かんだら、遊歩道の途中で自転車を止め、すぐ雑記帳に書き殴ることにしている。朝は明るいからまだよいが、帰宅時は暗いのでメモを取りにくい。だから、遊歩道のはずれの街灯まで急ぎ、その下で雑記帳に書き込む。

こう書いてくると、わたしは四六時中メモを取っている様だが、もちろんそんなことはない。ただ、メモを取ることはわたしの生活の一部になっていることは確かである。次から次へと思い浮かぶ想面を、記録しないままに散逸してしまうのは、いかにももったいない。そうしないと、どうも気が休まらない。

さて、雑記帳に書き殴ったメモは、ほとんど雑念の書き殴りにすぎない。

このメモを参考にし、さらに深く考えることが必要である。

だが、殴り書きしたメモは、きちんとした文章にもなっていないし、清書しなければ使い物にならない。だからといって、メモ全てをパソコンに入力するのもまた大変な作業である。別に本業を持つ身であれば、そんな時間はない。

だから、最近はメモを1ページずつ切り離して、10段ほどある引き出しのついたファイル・ケースに取りあえず放りこんでおく。放りこむときには、キーワードになる箇所に赤で丸印をつけておく。たとえばメモの内容が「神」に関するものであれば、「神」の部分を赤のボールペンで囲む。

それぞれの引き出しほは、紀行記、随想、人生論、趣味、家庭などにおおざっぱにわけてある。そして暇なときに、たとえば「随想」の引き出しを開け、「神」に関する切れ端をまとめてホチキスでとじる。その上で使えないメモは投げ捨て、多少ともモノになりそうなメモだけを残す。

その上でメモを参考にしながら、メモに触発された考えをパソコンに入力したり、テープに吹き込み、後にスタッフに反訳してもらう。この様に、「神」について、メモ書きしたときの荒いアイデアを、後に見直すことになる。2段階を経て、思索の練度は深まる様になる。

最近では小型の録音機も開発されたので、ずいぶん便利になった。仕事のスケジュールや、思いついたことを吹込むビジネスマンも増えている様である。

しかし、わたしの経験からいうと、簡単なメモはいいが、重いテーマについては、始めから録音機を使うのは向いていない様に思う。思い浮かんだ想念を吹き込んだところで、ほとんどは無駄になる。やはり一度メモにして取捨選択し、その上で考えをそぞぎ込む方が効率がよい。

それに、録音機を使うと「いつでも、どこでも」という訳にはいかない。電車に乗りながらテープを取るわけにはいかないし、通勤電車の中で吹き込むのでは他人の迷惑になる。サウナに録音機を持ち込んだら、すぐに故障してしまうだろう。プールサイドでテープに吹き込んでは、多くの目にさらされることは請け合いでいる。

——メモを取ることは考えること——

メモを取ることはなぜ物事を深く考えることになるのだろうか？

それは書くという行為が、必然的に自分を客観視することにつながるかららしい。メモを取るときには、いったん自分の頭に浮かんだ想念を、もう一度なぞってそれを目前のメモ用紙に書き表すという作業を伴う。この書くという作業の過程で、頭に浮かんだ想念は取捨選択される。この過程で、思索の練度が高まる。

後にメモを推敲するときは、メモを書いたときの自分の感情はおさまっているから、多少とも客観的に自分の考えを再検討することができる様になる。

物を考えるという作業の一面として、対象を出来るだけ細分化する過程を伴うことがわかる。

メモを素材に原稿を書こうとパソコンに向かって、あれほど書く素材があったはずなのになかなか筆が（キーボードが？）進まないことがある。

これは自分では大した考えだと思っても、深く考え込んでいなかったため、筆が進まないのである。考えがまとまらないのではなく、実は考えていなかったことがわかる。

この様にわれわれの考えと称するものは、漠然としたアイデアや雑念にすぎないのであるから、良質の思索に至るためには、必ず書くという作業を伴わなければならない。書くという作業を伴うことなしに深い思索は決して達成できないであろう。

さて、メモを参考に、さらに「考えをそぞぎ込む」という作業を経ないと、良質の思索は決して生まれないものである。

最近は特にビジネスの世界でも即断即決がはやる様である。だが即断即決できる様なものは、要するに既存の思考の枠内で処理できる問題であるにすぎない。従来の自分の経験に照らして、特に考えることなく感覚的な判断を下しているにすぎない。この様な「生の判断」や「とっさの判断」は危険である。

日々の小さな問題を立ち止まって考え、考えを注ぎ込むことが大切。ただ年を取り経験を積んでちょっと物事を考えれば、直感的に思考が深まるものでは決してない。

一般的教養があったからといって、深い思考ができるわけでは決してない。

新しい問題での対処、新しいパラダイムの創造、将来を見通す深い思索などは、深く考える十分な時間なしには決して生まれないものである。

誰でも文章を書くときに経験することだが、思い切って文章を削らないと、なかなかよい文章にはならない。

わたしの場合は、最初のドラフトの半分近く削ることがしばしばある。時には7、8割も削ることがある。この様な「捨てる」という行為を通じて、われわれは自分の考えを検討する余裕が出来る。パソコンの画面上で、紙の上で、自分の文章を「見る」という過程が、心の余裕を生むのであろう。

この様に、メモを書くことは、自分を客観視することにつながる。メモを取ることは、考えることである。逆にいえば、書くという作業を伴わない思考は、必ず欠陥があるに違いない。